

ツインターボに
よろしく

(二百字詰原稿用紙 二四〇枚)

登場人物

- ・星野寿帆(17) 高校生 陸上部員
- ・吉村弘文(17) 高校生 陸上部員

- ・星野瑞恵(27) 寿帆の姉 トラックドライバー
- ・上村正輝(29) 瑞恵の婚約者
- ・北野達也(17) 寿帆の同級生(交際相手)
- ・脇坂誠一(33) 陸上部顧問
- ・寺本奈美(33) 誠一の大学時代の同級生
- ・佐倉信一郎(28) 電気店二代目
- ・酒井由紀(17) 寿帆の同級生

- ・女子陸上部員A・B
- ・校長

その他

○某高校運動場（放課後）

△テロップ一九九三年・五月△

近畿地方、某県・某県立高校。

運動場では陸上部が練習している。

グラウンド中央あたりに立っている星野寿帆（17）。

深呼吸をひとつ。見つめる先には走り高跳びのバー。手を挙げる寿帆。弧を描くようにゆっくり走り出す。加速。踏み切って、ジャンプ！

綺麗な背面跳びでバーを超える。クツシヨンに落ちたまましばらく空を見上げる。澁刺としたその顔は自信に満ちている。

クツシヨンから降りた寿帆の目に入ったのは、トラックを走る同級生の吉村弘文（17）。肥満体。鈍足。顎が上りよたよたと不細工に走っている。

寿帆、弘文を見ながら舌打ちを一つ。颯爽と走る女子部員たちに次々と追いつかれていく弘文。

胸を張ってスタート位置に戻る寿帆。画面、ゆっくりと暗くなっていき。

○メイインタイトル

△ツインタローボによるしくん

○帰り路（夕方）

北野達也（17）と並んで歩く寿帆。

寿帆「暇そうにして待ってるんやったら何か部活入ったら」

達也「別にヒマやない」

寿帆「図書室のソファで寝てるだけやん」

達也「何ほでも寝れるわ俺」

寿帆「家でもそんな寝てるのん？」

達也「うん、寝てる」

寿帆「そやのに何でそんなに成績ええのん？」

達也「知らん。ま、元から頭がエエんちゃう」

寿帆「むかつくわ」

達也「へへっ」

寿帆「ふふっ」
達也「もうすぐやな県総体」

寿帆「うん」

達也「調子は？」

寿帆「絶好調。優勝して近畿大会や」

達也「おー、大きく出たね」

寿帆「去年はあとちょっとでインハイ出られへんかったけど、今年は絶対出るで」

達也「自信満々」

寿帆「分かるんや自分で、伸びてるって。記録だけと違うで。何て言うたらええかな：あんな、分かるんや。自分で自分の実力が伸びてるって」

達也「ふーん」

寿帆「……あんまり興味なさそう」

達也「そんなことない」

寿帆「嘘ばかり」

達也「嘘やない。寿帆のことはみんな興味ある。おまえが自分で自分のことさういうふうに感じてるのは、俺も嬉しい」

寿帆「ほんまに？」

達也「ほんまや」

寿帆「へへっ」

寿帆手を出す。握る達也。手を繋いで帰る二人。

自転車に乗った弘文が二人を追い越していく。寿帆、舌打ち。

寿帆「何やあいつほんま」

達也「吉村？」

頷く寿帆。

寿帆「才能も体力もないのに陸上部なんか入って。千五やって。何考えてるんやろ」

達也「中学校でもいっしょやったんやろ。そのときも陸上やってたんか、あいつ」

寿帆「ううん。美術部とかやったんちゃう」

達也「それが何で高校になって急に陸上部なんや」

寿帆「知らんやん、そんなん」

達也「砲丸投げとかの方が向いてるんちゃうの」

寿帆「それ、顧問のワツキーも言うたことあるらしいわ。けど『ぼく走りたいんです』の一点張りやったって」

達也「ふーん。ダイエツト目的かなあ」

寿帆「この前の市大会でも三周も周回遅れだな。トップからと違うで。自分の一つ前の選手からやで！ 一人でヨタヨタヨタヨタ走って、ヘロヘロになってゴールして。他の学校の子らみんな爆笑してたわ。こつちが恥ずかしかったわ」

達也「ま、エエンちゃうん。本人が走りたと言ってるんやから」

寿帆「エエことないわ！ 練習しててもやる気削がれるんや、あいつが走ってるとこ見ると。他のみんなもそう言うてるわ。ほんま、辞めてくれへんかなあいつ」

達也「嫌われたもんやねえ、吉村君も。ま、気持ちには分らんこともないけど。俺、朝目が覚めて、外見が吉村君に変わってたとしたら……」

寿帆「したら？」

達也「死ぬな、うん。ソツコー自殺する」

寿帆「あははは」

二人、手を強く握り並んで帰って行く。

○県高校総体が行われている競技場（昼）

△テロップ・五月 県高校総体▽

各種競技が行われている。

× × ×

スタート位置に立っている寿帆。

手を挙げ、走り出す。踏み切って、ジャンプ！

高く軽やかな飛翔。クリア。

クッションの上立ち上がる。

寿帆「つしゃあっ！」

ガッツポーズ。

× × ×

表彰式。

一位の台に立ち役員から賞状を受け取る寿帆。満面の笑み。

○競技場を出たところ（夕方）

制服に着替えた寿帆が引率の顧問の脇坂誠一（33）と並んで歩いている。

脇坂「今日は全部ええジャンプやった」

寿帆「はい、ありがとうございます」

脇坂「跳ぶたびに実力が上がる気がするやろ」

寿帆「分かりますか」

脇坂「ああ。俺にもそんな時があったからな」

寿帆「先生にも」

脇坂「ああ。俺は幅跳びやったけどな。毎日練習が楽しくて楽しくてしかたなかった時がある。そんなときは伸びてるときや」

寿帆「はい」

脇坂「星野、俺は今日確信した。おまえは全国レベルの選手になった。近畿大会もまず大丈夫や」

寿帆「全国レベル……」

脇坂「ああ。俺が初めて出会った全国レベルの選手や、おまえは。行くぞ、インハイ」

寿帆「はい、絶対」

脇坂「けどな、油断するなよ。アクシデントだけには気をつけれ。練習は今まで以上に集中してやれ。ええな」

寿帆「はい。分かってます」

歩いていく二人。

脇坂「あれ？ おい、あれ吉村とちやうか」

寿帆「え？」

脇坂「ほら、あの前歩いてるヤツ。あれ、絶対そうやで」

指差す脇坂。

脇坂「おい、吉村あ」

振り向く弘文。歪む寿帆の顔。

脇坂「やっぱりそうや」

弘文に近寄る脇坂。寿帆も渋々ついていく。

弘文「こんにちは」

脇坂「おう。おまえ、もしかして星野の応援に来てくれてたんか」

弘文「はあ、まあ、一応」

脇坂「そうかあ。来れるやつは応援に来たれ
って言うてたけど、おまえが来てたかあ。

顔見せてくれてたら、よかったのによ」

弘文「はあ、まあ」

脇坂「見てたか、星野が跳ぶの」

弘文「はい」

脇坂「そうかあ。優勝や星野。近畿総体出場
決定や」

弘文「はい。あの、星野さん。優勝、おめで
とう」

寿帆、弘文と目を合わせず、少し頷い
ただけ。

弘文「そしたら、ぼくはこれで」

脇坂「なんや、いっしょに帰ろうや」

寿帆の顔が歪む。

弘文「いえ、近くの親戚の家に用事があるん
で」

脇坂「そうか」

弘文「失礼します」

去っていく弘文。

脇坂「応援に来てくれてたかああいつ。エエ
やつちゃんあ。なあ星野」

寿帆「……はい」

歩き出す脇坂。寿帆その場にたちつく
したまま。数歩歩き振り返る脇坂。

脇坂「どないした？」

寿帆「先生」

脇坂「なんや」

寿帆「あの子……吉村君、グラウンドで練習
させんといってください」

脇坂「え？」

寿帆「あの子がトラック走ってるのを見ると、
気持ちが悪えるんです」

脇坂「星野、おまえ……」

寿帆「はっきり言って目ざわりなんです。あ
の子が走ってるグラウンドじゃ、今まで以
上に集中して練習なんかできません。」

脇坂「……同じ部員やぞ吉村も」

寿帆「同じ、部員ですか、吉村君とわたし。

脇坂先生にとつて」

見つめあう二人。

脇坂「……考えておく」

歩き出す脇坂。ため息をつく寿帆。脇坂の後をついていく。

○寿帆の家・外景

小さな一軒家である。

○同・居間（夜）

寿帆の祝勝会。座卓の上でスキヤキの鍋がぐつぐついつている。

座っている寿帆と彼女の姉、瑞恵（27）。

瑞恵の婚約者の上村正輝（29）。

正輝「えー、では寿帆ちゃんの県総体優勝、を祝い、近畿大会での活躍を祈って、がんばーい！」

グラスを合せる三人。ささやかな宴が始まる。

瑞恵「寿帆、よう頑張ったな」

寿帆「うん——でもこんなまだ通過点や。目標はあくまでインハイやし」

瑞恵「応援に行けんで悪かったな。どうしても夕方までに届けなアカン荷いが急に入ってしまったな」

正輝「他のドライバー手配しよって思ったんやけど、連絡ついたの瑞恵だけやったから。ごめんな、寿帆ちゃん」

寿帆「別にエエよ、そんなん」

瑞恵「応援に来てくれてた部の人はいてたんか？」

寿帆「——うん、まあ、ひとり、いてた」

瑞恵「そうか。何て子」

寿帆「……エエやん、誰でも。お姉ちゃんの知らん子やし」

瑞恵「うん。まあ、誰でもエエけど、そういう人の気持ちは大事にせなアカンよ」

寿帆「分かってる……」

瑞恵「これからは今まで以上にケガには気をつけなアカンで」

寿帆「うん」

グスグスと泣き始める正輝。

瑞恵「何泣いてるのよアンタ」

正輝「寿帆ちゃん、二年連続県で優勝やなんて、ホンマによう頑張ったなあって思ってお父さんも、お母さんもきつと、喜んでるやろなあ。そう思たら——うつ、ううつ……」

瑞恵「もう、しめっばいなあ、ほんま。お祝いなんやで。泣きなや」

正輝「けど、けどおまえ——」

寿帆「——喜んでくれるかな、お父さんとお母さん」

瑞恵「当たり前やろ。お父さんのあんたのかわいがり方なんか、尋常やなかったんやから——エエこと教えたるか」

寿帆「何」

瑞恵「アンタが赤ん坊のときな、『お父ちゃんが一番！』いうてようあんたの乳首チュツチュチュツチュしてたんやで」

寿帆「うそお！」

瑞恵「嘘やあるかいな。またあんたがそれにキヤツキヤツキヤツキヤいうて喜んでなあ。わたしもお母さんも呆れて見てたわ。わたしお母さんに聞いたんや。わたしにもあんなことしてたんかって。そしたらしたことない、やて。何かム力つくわあ」

寿帆「そうなんや」

瑞恵「十年ぶりに生まれた娘で、よほどかわいかったんやろあんたのことが——覚えてるか、お父さんとお母さんのこと」

寿帆「うん、ちよつとは。動物園行ったこととか、覚えてる」

瑞恵「あれ、あんたが五つするときやな。わたしは行かんかった。わたし中三でな、なんか家族で動物園なんて恥ずかしい。家に居てた——それから一カ月くらいしてから事故やった」

寿帆「うん」

瑞恵「わたしも行ってたらよかったな、動物園」

しみりとした空気の中、正輝の泣き声がいっそう大きくなる。

瑞恵「ほらあ、あんたのせいで変な空気になってしまったやないかあ」

正輝「そやかて、そやかてえ」

瑞恵「もう。ときどきつきあい考えてしまうわ——けど、ほんまに寿帆はよう頑張ってる。二年連続県総体の優勝はたいしたもんや。この細腕で大型転がして養ってる価値は十分ある」

ハンドルを操作する仕草をする瑞恵。

寿帆「お姉ちゃん」

瑞恵「ん？」

寿帆「——ありがとう」

瑞恵「なんやあ、あらたまつてえ」

寿帆「お姉ちゃんのおかげで、わたし、高校行けて、好きなハイジャン続けられてる」

瑞恵、泣きそう。正輝、もはや号泣の域。

瑞恵「アカンアカン！　こんなん苦手や！

ほら寿帆、肉食べ、肉！　奮発したんやから！　よおし祝杯や！　わたしも飲むぞお

——おらあ、いつまで泣いてるんや！　エエかげんにせえ！　鬱陶しいんじゃ！」

正輝「そやかて、そやかてえ……」

ささやかで温かな祝宴が続く。

○同・畳の間

仏壇。そこに飾られている、仲良さそうによりそう姉妹の父母の写真が写つて。

(F・O)

○職員室（放課後）

日直表を担当の机に返しにきた寿帆。脇坂が自分の前に立っている弘文に話しをしている。

その様子をじっと見つめる寿帆。担当の机の上に日直表を置くと職員室を出て行く。

○グラウンド（放課後）

柔軟体操をしている寿帆。一年生の後輩二人がやってくる。

後輩A「聞きました？ 星野先輩」

寿帆「何を？」

後輩B「吉ブーさんのことですよ」

寿帆「ううん」

後輩A「吉ブーさん、今日からトラックじゃなくって、学校の周り走るようになったそうです」

寿帆「……そう」

後輩B「で、ちょっと聞いたんですけどお、それワッキーに言ったのって星野先輩なんですか」

寿帆、答えない。顔を見合わせる後輩二人。

後輩A「先輩、グッジョブ」

後輩B「正直ウザかったですもんね、吉ブーさんがトラック走ってるの」

黙々と柔軟体操を続ける寿帆。

後輩A「あの、それからあ、先輩の県総体、吉ブーさんが応援に行ってたって、マジっすか」

後輩B「もしかして吉ブーさん、先輩の事が好きだったり……」

鋭い目つきで二人を睨みつける寿帆。

逃げるようにして寿帆の前から去って二人。

× × ×
スタート位置に立っている寿帆。手を挙げたときに脇坂がやってくる。

脇坂「星野」

寿帆「はい」

脇坂「あれでエエんか」

グラウンド外に目をやる脇坂。寿帆も同じ方を見る。二人の視線の先には、フェンス外、周回道路をどたどたと走る弘文の姿が。

寿帆「……はい」

脇坂「そんなに嫌やったか、吉村が走ってるグラウンドで練習するの」

寿帆、黙って答えない。

脇坂「俺が出来ることはこまでや」

寿帆「先生」

脇坂「何や」

寿帆「吉村君に言ったんですか。わたしが目ざわりに思ってるからトラック走らないでほしいって思ってること」

脇坂「言うわけないやろ。クロカンの練習してみるかって言うたんや。そしたらあいつ黙って頷いたわ」

寿帆「別に、言うてくれてもかまへんかったのに……」

脇坂「……星野」

寿帆「何ですか」

脇坂「まあエエ。とにかくおまえは結果出せ。

近畿大会ぶち抜いてインハイや」

寿帆「はい」

脇坂「けどな、最後に言うとか。吉村は分かってるぞ、何で自分がトラック走られへんようになったか。それからな、おまえの県総体、応援に来てくれたのはあいつだけや。つたんやぞ。そのことは忘れるなよ」

寿帆「……」

脇坂「よっしゃ、練習や。一本一本集中して跳べ。来週にはハイジャンやってた俺の大学の同級生呼んでるからな。女や。現役時代はエエ選手やったんやで。俺では指導で。きんことも教えてくれるやろ。しっかりこーちしてもらえ」

寿帆のそばから離れる脇坂。

寿帆「先生！」

振り返る脇坂。

脇坂「何や」

寿帆「そんなん知りませんよわたし、吉村君のことなんかっ！」

駆けだす寿帆。踏み切ってジャンプ。

脚が引つ掛かり失敗。

悔しげにクッションを拳で叩く寿帆を

じつと見つめる脇坂。

○近畿高校総体が行われている競技場
スタート位置に立っている寿帆。
手を挙げ、走り出す。踏み切って、ジ
ヤンプ！
高く軽やかな飛翔。その頂点でストツ
プモーション。

○某高校校舎

《祝 近畿高校総体 走り高跳びの部
優勝 星野寿帆さん 全国でも翔べ！》
の垂れ幕がかかっている。

○帰り路

達也「この時間寿帆と帰るなんて初めてや
ないか」

寿帆「そやね……ワッキーが抜くことも大事
やからって」

達也「なんか、心ここにあらずみたいな感じ
やん」

寿帆「そんなこと、ないけど……ただ、練習
休んだらやっぱり不安で。貯めてきた力が
落ちる様な気がして……」

達也「そんなん気のせいや」

寿帆「分かってる、分かってるけど……」

達也「ノリ悪いな……そしたら今からワッキ
ーのとこ行ってやっぱり練習させてくださ
い、いうて頼んでこいや」

早足で先に進みだす達也。

寿帆「ごめん、達也。ごめん」

慌てて追いつく寿帆。

達也「こんなときくらい、部活のこと忘れて
もエエやん」

寿帆「うん、そやね、ごめん……」

達也の手を握る寿帆。

○ゲームセンター・外景

○同・中

対戦型のゲームやいろんなアトラクシ
ョンで楽しげに遊ぶ寿帆と達也。

○寿帆の家近くの路上

夕暮れの中、手を繋いで歩く二人。

達也「たまにはエエもんやろ、こんな放課後
も」

寿帆「うん、そやね。たまには」

達也「……やっぱり空に向かって跳び上がる
放課後の方がエエか」

寿帆「……」

○寿帆の家の玄関先

寿帆、達也の手を離す。

寿帆「ほなら、これで。今日は楽しかった」

達也「寿帆」

寿帆「何」

達也「おまえ、俺が陸上部やめろって言うた
らどうする？」

寿帆「……なんで、なんでそんなこと訊くの
ん」

見つめあう二人。近寄る達也。寿帆の
肩を掴んで。

寿帆「えっ、ちよっ……」

達也の強引な口づけ。目を見開き驚く
寿帆。唇を離す達也。

達也「キスしたかってん、おまえと」

寿帆「そやけど、そやけど、こんなん……」

達也「こんなん、なんや」

寿帆「こんなん、こんなんアカンわ……」

達也「そしたらどんなんやったらエエんや」

寿帆「……」

達也「その先もしたいで、俺」

再び顔を近付ける達也。

寿帆「嫌やっ！」

達也の頬を叩く寿帆。

互いを睨むようにして見つめあう二人。

達也「もう一回訊くわ。おまえ、俺が陸上部
やめろって言うたらどうする？」

答えず玄関ドアを開け家の中に入る寿

帆、激しく音たててドアを閉める。

○校舎周回道路

夕暮れの道、よろよると走っている弘文。

校庭、寿帆の垂れ幕の下までやってきて止まる。

垂れ幕を見上げ、微笑む弘文。

○グラウンド（放課後）

練習をしている寿帆。失敗ジャンプが続く。近寄る脇坂。

脇坂「どないした」

寿帆、クッションから立ち上がったスタート位置に戻りながら。

寿帆「どうもしません」

脇坂「調子落としてるように見えるけどな」

寿帆「本番には合わせます。先生」

脇坂「何や」

寿帆「もう休みはいりません。日曜も練習します。調子悪いのはこの前休んだからです。あと一カ月、一日も無駄にしたいくないんです」

脇坂「……分かった。正直俺もインハイ出る選手指導するのは初めてで、何が正解なんか分からないのや。おまけに専門外やしな。おまえがそこまで思ってるんやったら、そ

ないしたらエエ。その気持ち尊重したる」

寿帆「ありがとうございます」

脇坂「あんな、星野」

寿帆「明後日おまえ指導にくる光岡——寺本奈美」

寿帆「はい、すごく楽しみです。訊きたいことたくさんあります」

脇坂「うん。なんでも聞いたらええ——あんな、俺とその寺本いうんな、大学の時つきあってたんや」

寿帆「えっ」

脇坂「ま、自然消滅言うんか、そんな感じで別れてもうたんやけどな。今やこちらも

あちらも二児の親や」

寿帆「じゃあ、その人、先生の元恋人……」

脇坂「ま、そういうこっちゃ。星野」

寿帆「はい」

脇坂「待人来る、とちゃうんか」

寿帆に笑い掛けながら、後ろを指差す

脇坂。

寿帆「え」

グラウンド入口に立っている達也を見る寿帆。

○グラウンド入口

向いあつて立つ寿帆と達也。

達也「この前は、ごめん。俺が悪かった。変なこと訊いたりして。それに……」

寿帆「もう、ええよ。こっちこそ、叩いたりして、ごめん」

達也「……痛かったわ」

寿帆「……本気で、叩いたもん」

見つめあう二人。どちらからともなく笑いだす。やがて寿帆、真剣な顔つきになって。

寿帆「あんな」

達也「分かってる」

寿帆「え？」

達也「本番まで、練習に集中したいんやろ。

俺のことも考えたあないくらい」

寿帆「……ごめん」

達也「それでええ。そんな寿帆やからエエんや」

寿帆「ありがと……」

達也「いつやったっけインハイ」

寿帆「ハイジャンは、八月三日。それまでは

会わんとこ」

達也「……分かった。夜の電話もせんとくわ」

寿帆「……うん。ごめん」

達也「謝らんでもエエよ。栃木やったな」

寿帆「覚えててくれたんや」

達也「当たり前やん。頑張ってこいよ」

寿帆「うん。あんな」

達也「何や」

寿帆「インハイ、終わったたら、どっか遊びに行こ」

達也「うん。海、行かへんか」

寿帆「海かあ……行きたい」

達也「けど寿帆、おまえ水着持ってるのか」

寿帆「持ってへんけど……買うもん、かわいいやつ」

達也「スクール水着で来たたら、ほっといて帰るで」

寿帆「着いひんわ、スクール水着なんか！」

笑いあう二人。

達也「寿帆、この前はほんまにごめんな」

寿帆「アカン。やっぱり、許してあげへん」

達也「え」

寿帆「本気でそう思ってるんやったら、海行つた時にな……」

達也「分かった。ちゃんとしたのん、する。

この前のやつはノーカウントや、ノーカンや」

寿帆「ノーカンで。都合エエなあ」

笑う二人。

達也「なあ」

寿帆「何」

達也「海は、泊りがけで行きたい」

寿帆「……」

達也「アカンか」

寿帆「——考えさせて」

達也「うん」

間の悪い二人。そのとき学校回りを走っていた弘文がどたどたとやって来て、二人に近づいてくる。

寿帆「げっ」

達也「うわあ、近くで見たらキモさ三割増しやなあ。こら寿帆のやる気もなくなるわ」

寿帆「そやろ」

蔑んだ目で見つめる二人の顔を汗まみれの弘文が荒い息を吐きながら過ぎていく。

達也「吉村あ！」

振り返る弘文。

達也「間あ悪いんやおまえ！ はよ消えろボケえ！」

苦笑いを浮かべ少し頭を下げ、どたどたと走っていく弘文。

寿帆「死んだらエエンや、あんなやつ」

だんだんと小さくなるその背中を見ながら吐き捨てるように。

○グラウンド（放課後・日がわり）

寺本奈美（33）が見守る中練習をする寿帆。

寺本「よし、この一本でラストにしよう。決勝進出がかかった一本やと思つて、跳んでみ」

寿帆「はい」

深呼吸する寿帆。走り出し、跳躍。クリア。

クッションから降りたその顔に浮ぶ満足そうな笑み。

寺本「オッケー。ナイスジャンプ」

× × ×

グラウンドの隅、水道で顔を洗っている寿帆に寺本が近付く。

寺本「ほい」

ペットボトルのスポーツドリンクを寿帆に渡す寺本。

寿帆「あ、ありがとうございます。あの、寺本さん」

寺本「何」

寿帆「大学の時、脇坂先生とつきあってたつて聞いたんですけど。本当ですか」

寺本「脇坂君から聞いたん？」

寿帆「はい」

寺本「もう、あいかわらずしゃべりやなあ。

はい。否定しません。あなたがたの顧問、

脇坂誠一さんとわたし、寺本奈美、旧姓光

岡奈美はかつて恋人どうしでした」

寿帆「——あの」

寺本「何、別れた理由訊きたいの？」

寿帆「——はい」

寺本「ふふ。いくらハイジャンに夢中やいうても、そういうのに興味あるお年頃やもんなあ。脇坂君は何か言うてた？」

寿帆「自然消滅やっつて」

寺本「自然消滅かあ——ふふ。嘘や」

寿帆「え」

寺本「自然消滅なんて嘘。わたしにな、他に好きな人ができてんよ。それが今の旦那なんやけどな」

寿帆「他に好きな人が——今の、旦那さん」

寺本「うん。部のマネージャーやっつてな、

彼。競技やっつてるときは全然何も思わへんかった。ぶっちゃけ軽蔑したりしてた。ちやんと口きいたこともなかったわ。何でこの人、競技せんのに部に居てるんやろうって。何で自分からマネージャーなんて仕事しててるんやろうって。それにわたし脇坂君に夢中やっつたし。けどな」

寿帆「けど」

寺本「三回生のときの競技会でな、アキレス腱やっつてもうてんよ、わたし」

寿帆「——アキレス腱、ですか」

寺本「うん。一生跳ばれへんようになってしまったんよ。次やったら、普通に歩かれへんようになる可能性もあるって、ドクターに言われてな」

寿帆「——」

寺本「その時、支えてくれたんが、今の旦那やっつたん」

寿帆「脇坂先生よりも？」

寺本「ふふっ。残念ながらそうやっつた。その時初めて知ったん。彼、短距離の選手やっつてんけど、高校最後の大会前に交通事故にあつて、二度と思ひ切り走りへん体になつたこと——ほんの少しだけ、右足引きずつて歩くんよ、うちの旦那」

寿帆「——」

寺本「自棄になつてゐるわたしのそばにずっといてくれた。ある日病室で泣いてゐるわたし

にな、『死ぬなよ』って言うてくれたんよ。
あのとき、一発で惚れてしもた」

寿帆「死ぬなよ、ですか」

寺本「うん。誠——脇坂先生からその言葉
が出ることはなかった。けど、それは仕方
のないことやって、今だったら分かる。あ
の気持ちは、いきなり競技続けられへんよ
うになった人間にしか分からへん」

寿帆「——脇坂先生、よく納得しましたね」

寺本「それがな、ちよつとカッコエエねんで」
寿帆「え」

寺本「わたし正直に話したよ、今の旦那を好
きになってしもたこと。そしたら彼領いて
ね『今の、これからの、おまえを支えられ
るのは俺より寺本や。悔しいけどそれは間
違いないんや。寺本のところへ行ったらエ
エ』って、そう言うてくれた。わたし、誠
一のあの言葉も一生忘れへん。それからわ
たしも今の旦那といっしょに、部のマネー
ジャーになった」

寿帆「確かにちよつとカッコイイかも、ワツ
キー」

寺本「けどそれからしばらくは飲み会するとき、
よう泣いてたらしいわ『奈美い、奈美い』
。ほんまは別れたなかってん。戻って
きてくれ奈美い』いうて」

寿帆「うわっ。ダサッ」

笑い合う二人。

外周をどたどたと走る弘文にちらっと
目をやる寺本。寿帆は気づかない。

(F・O)

○商店街・佐倉電気店 外景(昼)

へテロップ・七月十一日・日曜日

入って行く弘文。

○同・中

店内を歩いていく弘文。そこにいる二

代目・佐倉信一郎(28)。

信一郎「お、来たな」

弘文、笑って頷く。二人、競馬中継が

映し出されているいちばん大きなテレビの前に並んで立つ。テレビ画面にはパドックを周回する出走馬が映し出されている。

弘文「仕事、ええんですか」

信一郎「何やボなことを訊くねん」

弘文「何番人気ですか」

信一郎「三番や」

弘文「おー」

信一郎「今日からヤネが中館や。今、逃げ馬に乗せたら右に出るもんいてへん。陣営も気合い入ってる証拠や」

弘文「エエ感じちゃいます」

信一郎「うん。落ち着いてる」

弘文「今日こそ」

信一郎「ああ、今日こそ」

じっとテレビ画面を見つめる二人。

○グラウンド（夕方）

練習終わり。片付けをしている寿帆に寺本が近寄っていく。

寺本「さすがに日曜やから走ってないんやね、あのおデブちゃん」

寿帆「え？」

寺本「ほら、前にわたしここに来た時、校舎の外周一生懸命走ってたおデブちゃんいてたやん」

寿帆「吉村君のことですか」

寺本「そうそう、吉村君」

寿帆「吉村君が、どうかしましたか」

寺本「あの子、トラック練習させへんように脇坂くんに頼んだの、星野さんやつてね」

寿帆「……ワッキーのおしゃべり」

寺本「気持ち、分かるで」

寿帆「え」

寺本「目ざわりやったんやろ、不細工にブルブル汗かいて走ってるあの子が」

寿帆「はい。分かってもらえますか」

寺本「才能のあるアスリートはみんなエゴイストで残酷や」

寿帆「……」

寺本「共感するわ。けどそれは競技続けてる
ときの私だったら、の話しや」

寿帆「え？」

寺本「星野さん。何で『心技体』って言うん
やろな。『体技心』とか言わんのは何でやろ。
何で心がいちばん初めに来るのか、考えた
ことない？」

寿帆「それは……」

寺本「ま、お母ちゃんにもなるとな、いろん
なことが見えてくるってわけよ。まして、
わたしみたいな競技断念した人間はよけい
になあ」

寿帆「わたしには分かりません」

寺本「分からなくて当然や、今はね」

寿帆「お説教だったら、結構です」

寺本「うん。今のあなたはそれでエエんよ。
わたしがあなたと同じ立場だったら、吉村
君トラックから閉めだしてるかもしれへん。
たぶんそうしてるわ」

寿帆「——」

寺本「ただね、今のわたしはあのおデブちゃ
ん、吉村君が走ってる姿、好きやな。彼の
全力疾走が何や知らん眩しいてたまらんわ
——ごめん、いらんこと言うたね。ほな、
これで」

背中を向けて立ち去ろうとする寺本。

寿帆「全力疾走？」

寺本振り返って。

寺本「そう、全力疾走」

寿帆「あれが、ですか？」

寺本「そうやろ。彼の持てる力全て出し切っ
て必死になって走ってるんやから、あれは
彼の全力疾走や——ちがう？」

寿帆、しばらく寺本を見つめているが、
やがてクスクスと笑いだす。その笑い
はやがて大きくなっていき。

寿帆「ははっ、はははははっ。全力、疾走。あ
れが、あれで全力疾走。あはははははっ。ち
よ、寺本さん、笑わせないで。くっ、苦し

い。あははははっ」

その場に崩折れるようにして笑い続ける寿帆をじっと見つめる寺本。

寺本「さいなら、星野さん。本番までにもう一回くらい来ようかと思つてたけど、わたしがこのあなたに教えられることはもう何も無いわ。インハイ、がんばってね。それじゃ」

立ち去る寺本。

寿帆その場で笑い続けている。

(F・O)

○グラウンド(放課後)

練習をする寿帆。その姿に脇坂との会話が重なる。

脇坂の声「何があつたんや。寺本、もうおまえの指導したくないって言うてたぞ」

寿帆の声「別に……寺本さんからは教わるべきことは教わりましたし、わたしももうあの人の指導は必要ありません」

脇坂の声「星野……」

寿帆の声「インハイ後は、現役の手か、ほんまものコーチ呼んで来てほしいです。ちゃんと跳んで、見本見せてもらえる人を呼んでほしいです。先生」

軽々とバーを超える寿帆。

○校舎外周

喘ぎながら走り続ける弘文。その姿に信一郎との声が重なる。

弘文の声「行けっ行けっ行けっ行けえ！」

信一郎の声「逃げる、逃げるよおおっ！」

弘文の声「行つけええっ！」

信一郎の声「来るなよお、何も飛んでくるなよおおっ！」

二人の声「……よおしゃあっ！」

苦しそうに走りながらも笑っている弘文。練習を続ける寿帆に目をやりながら走り続ける。弘文に気づかず集中し

て練習を続ける寿帆。

○寿帆の家（早朝）

パジャマ姿の寿帆、寝ぼけ眼で居間へやってくる。朝食の準備をしている瑞恵。寿帆、椅子に座り、用意された朝食を食べ始める。

瑞恵「こら、いただきますくらいちゃんと一言わんかいな」

寿帆「……いただきます」

瑞恵「今日も練習か？」

寿帆「……当たり前。本番まであと三日なんやで」

瑞恵「夏休みも何もあったもんやないなあ。宿題ちゃんとやってるんやろな」

寿帆「……インハイ終わったらやる」

寿帆の前に座る瑞恵。

瑞恵「あ、さっき新聞取りに行ったらポストにこんな入ってたんやわ」

寿帆の前に小袋を差し出す瑞恵。

寿帆「え？」

封筒にはタイピングの文字で「星野寿帆様へ」と書かれている。

いぶかしがりながら小袋を開ける。中から出て来たのはお守り。寿帆掌の上のそれをじっと見つめる。覗きこむ瑞恵。

瑞恵「健脚御守」

寿帆「……うん」

瑞恵「はっはっん」

寿帆「……うるさい」

瑞恵「約束ちゃんと守ってお守り黙って置いてくなんて、エエとこあるやん。正直お姉ちゃん、もっとチャラチャラしてる子やっと思ってたわ、達也君のこと」

照れたように笑って小さく頷く寿帆。

顔を上げ瑞恵を見る。

寿帆「お姉ちゃん」

瑞恵「何」

寿帆「お姉ちゃん、初めて男の人としたん、

いつ？」

瑞恵「息を飲む。」

瑞恵「もしかして、達也君と、したんか？」

寿帆「首を横に振る。ほっとする瑞恵。微笑んで。」

瑞恵「隠し事はなしやもんなあ。正直に言わなアカンかあ。お姉ちゃん初めてセックスしたのは定時制高校二年のとき。つまり今の寿帆と同じ年」

寿帆「……そうやったんや」

瑞恵「相手は三つ上の工員さんで同じクラスの人。定時制はいろんな立場や年齢の人いてたからな。真面目なエエ人だな。この人やったらエエって思った。一年半くらいつきあったかなあ」

寿帆「……」

瑞恵「それからの経験は二人。そやから今の正輝が四人目。きつとあいつが最後の男になる——こんな答えでエエか」

寿帆「うん。ありがとう。あんな、お姉ちゃん」

瑞恵「何や」

寿帆「インハイ、終わったらわたし、達也君と泊りがけで海、行きたいんや」

瑞恵「——そうか」

寿帆「エエのん？」

瑞恵「その時に、か？」

寿帆「分からん。分からへん。けど、達也君が全部求めて来たら、受け入れてもエエって——受け入れたいって、そう思ってる」

瑞恵「寿帆」

寿帆「何」

瑞恵「ようちゃんと言うてくれたな。お姉ちゃん嬉しいわ」

寿帆「隠し事はなしやもん」

瑞恵「ははっ。そうやなあ、隠し事はなしや。そうかあ。寿帆ももうそんな年になったんやなあ」

寿帆「……」

瑞恵「自分だけ十七のときに済ませといて、

妹にはアカンっていうのもなあ——寿帆」
寿帆「何」

瑞恵、食卓の上で寿帆の手を握る。

瑞恵「わたしはあくまであんたの親代わりや、親と同じことはよう言わん。そやから、これは十歳上の姉から妹への言葉として聞いてほしい」

寿帆「うん」

瑞恵「達也君とセックスしたいって、心から思うんやったら、したらエエ。自分の気持ちに正直になったらエエ」

寿帆「お姉ちゃん……」

瑞恵「ただし、避妊は絶対にする。達也君にもそれを絶対にお願いすること。達也君がそれを嫌がったら、断固拒否すること。それ、約束できるか」

寿帆「——うん。約束する」

瑞恵「絶対によで」

寿帆「うん。絶対、約束する」

瑞恵「よし」

強く握りしめていた寿帆の手を離す瑞恵、朝食を食べる寿帆を微笑んで見つめる。

瑞恵「寿帆」

寿帆「何」

瑞恵「最初は、メチャクチャ痛いんやでえ。血イ出るんやでえ」

寿帆の動きが止まる。爆笑する瑞恵。

瑞恵「海から帰ってきたらな、お赤飯炊いて待つといたるか、二回目の」

寿帆「もう——」

瑞恵「ああ、もうこんな時間や。所長に怒られるわ。ほな、行くわな」

瑞恵、椅子から立ち上がる。

寿帆「うん。行ってらっしゃい」

玄関から出て行く瑞恵。

寿帆、テーブルの上に置いていたお守りを柔らかく握る。その拳を胸に当てる。

寿帆「手紙くらい書いて入れとけ、アホ」

その顔に浮ぶ笑み。

○グラウンド（昼）

野球部、サッカー部なども練習している中、いつもの場所で跳躍を繰り返す寿帆。成功ジャンプの連続。

× × ×

夕暮れ。グラウンドにはもう誰もいない。ひとり用具を片付けている寿帆。

○商店街（夕方）

寿帆、帰り路。商店街アーケードに『土曜夜店』の看板がかけられている。入って行く寿帆。少し時間が早いせいか、それほどの人ごみではない。様々な屋台に目をやりながら歩いていく寿帆。その顔はどこか楽しそう。軽やかな足取りで歩くうち、達也の顔を見つける寿帆。驚く。パツと輝くように広がる笑み。駆け寄っていくが。

寿帆「え……」

達也、浴衣を着た女を連れている。二人手を繋いでいる。

立ちつくす寿帆。二人が近づいてくる。気づく達也。

達也「寿帆……」

見つめあう二人。

○駐車場

商店駐車場の隅、向いあっている寿帆と達也。入口では女子生徒（酒井由紀）が二人を見ている。

寿帆「どういう、こと」

達也「……」

寿帆「ちゃんと説明してよ。あの子、二組の酒井由紀さんやんね。一年のとき同じクラスやったから知ってるわ」

達也「……」

寿帆「いつからなん」

達也「……うん」

寿帆「うん、ちゃうって。いつからって訊いてるんや」

達也「二年なって、すぐにコクられて、それから……」

寿帆「二年なってすぐって……わたしと、二股かけてたってこと？」

達也「……」

寿帆「あの子、達也くとわたしがつきあってるって知ってたんやろ」

達也「あいつ、それでもエエって言うから。」

二番目でエエって言うから」

寿帆「二番目でエエって……じゃあわたしが部活してるときや日曜の練習してるとき、

二人で遊んだりしてたんや」

達也「分かってるんやったら聞くなよ……」

寿帆「……したん？ あの子と、最後まで」

小さく頷く達也。

寿帆「……いつしたん？」

達也「五日前、夏休み入ってすぐや……おま

えがインハイ出場決めて、会うことも電話

もせんようになって、俺、やっぱり寂しか

った。けどそれから由紀と毎日会うようにな

って分かったんや。俺、おまえよりあ

いの方が好きやって。あいつが俺にとつて

一番の女やって」

寿帆「……わたしは、二番目でエエなんて言

わんからね絶対」

達也「分かってる、それくらい」

寿帆「何が分かってるや！ そしたらこんな

もんポストに入れたりしなやつ！」

財布に入れていたお守りを取り出し、

達也に投げつける寿帆。地面に落ちた

それを拾い上げる達也。

達也「何これ、俺、知らんで」

寿帆「え……」

達也の手からお守りを奪うように取り

返す寿帆。お守りを財布に戻しながら。

寿帆「終わりやね」

達也「……うん」

寿帆「楽しかったわ、それなりに」

達也に背を向け、歩き出す寿帆。駐車
場入口、由紀が声をかける。

由紀「星野さん」

立ち止まる寿帆。由紀を睨みつける。

由紀、怯まない。

由紀「インターハイ、がんばってね」

微笑む由紀。寿帆、しばらく由紀を睨
んでいるが、無言で立ち去る。達也の
ところへ駆け寄って行く由紀。

○商店街

賑わいの中、嗚咽しながら歩き続ける
寿帆。

(F・O)

○太陽

キラキラと画面いっぱい。

○全国高校総体・陸上競技会場(昼)

様々な競技が行われている。

○同・観覧席

女子走り高跳び決勝が行われている。

手を挙げ、助走し、跳躍する選手たち。

その中に寿帆の姿はない。

観覧席に座り、タオルを顔にあて泣い
ている寿帆。隣に座った脇坂、どう接
しているのか分からずとまどうばかり。

へテロップ・星野寿帆、全国高校総体・
走高跳の部 予選三度の試技全て失敗

|| 記録なし ||

むせび泣き続ける寿帆。

○某高校・校舎(朝)

始業式当日。生徒たちの登校風景。

寿帆のインターハイ出場を祝う垂れ幕
を教職員二人が巻き上げている。

○某高校・講堂

始業式が行われている。全校生徒を前

に校長が訓示を述べている。

校長「……えー、またこの夏は、二年八組の星野寿帆さんが陸上競技、走り高跳びの部で全国高校総体に出場するという、わが校創設以来の快挙を成し遂げてくれました。結果は残念ながら、惜しくも入賞なりませんでしたが、この貴重な経験を糧に、いっそう飛躍してくれることでしょう。皆さん、星野さんの健闘を讃えて、拍手！」

講堂に沸き起こる拍手。無表情な寿帆の耳に、女子生徒の声が聞こえる。

声①「惜しくも入賞なりませんでしたが、やて」
声②「ものは言いようやね。一回も成功せんと予選落ちらしいやん」

声③「天狗の鼻ポッキンや」

声④「知ってる？ インハイ前にな、北野くんと別れたらしいで」

声⑤「聞いた聞いた。二組の酒井に取られたんやろ」

声①「北野君、二股かけてるって、けっこうみんな知ってたよねえ」

声②「ご本人だけが気づいてなかったわけか」
声③「かわいそうにねえ」

鳴り響く拍手の中、俯く寿帆。

○グラウンド入口（放課後）

向き合っている脇坂と寿帆。寿帆、鞆を持って制服のまま。

脇坂「本気で言うてるのか」

寿帆「はい」

脇坂「校長も言ってたやろ、あの経験バネに頑張ってみるのがホンマと違うんか」

寿帆「……あんなん、エエ恥かかされただけです」

脇坂「恥つてなあ、おまえ……寺本が言うてたぞ。おまえに足りんのはとにかく気持ちやうて。このまま辞めたらおまえ、あいつの言うとおみやぞ。それでエエんか。このまま終わって悔しないんか。あ？」

寿帆「寺本さんがどう思おうが勝手です。と

にかくもう部活辞めたいんです。跳ぶ気になれへんのです——わたしはここまでの選手だったんです」

脇坂「星野……」

寿帆「今までありがとうございます。寺本さんにもよろしくお伝えください」

頭を下げ、脇坂に背を向ける寿帆。歩き出す。立ちつくす脇坂。寿帆、振り向かず歩き続ける。

ドストドス外周を走っていた弘文が脇坂のところへ近づいて来る。

○校門を出たあたり

弘文「星野さん、星野さくらん」

寿帆、立ち止まり振り返る。走って来る弘文。寿帆の前までやってくる。手を膝にやってせいせいと肩で息。

弘文「ほ、星野さん」

寿帆「何」

弘文「脇坂先生に、今、聞いた。ほ、ほんま？」

寿帆「何が」

弘文「いや、だから、陸上部、辞めるって、ほんま？」

寿帆「……何でわたしがあんなにそんなこと答えなアカンのん」

弘文「いや、それは、やっぱり、気になる……」

寿帆「わたしがどうしようとおんたに関係ないやろ」

弘文「でも、ほく、星野さん、陸上、走り高跳び、やめたらもったいない思うし……」

寿帆「ほっといてえや！ 何なんあんな！ ウザいんや！」

弘文「……」

寿帆「何なん！ 何でわたしがあんなに部活辞める理由言わなアカンのん？ エエわ、気になるんやったら教えたる。才能ないことが分かったからや、だから辞めるんや、

これで満足？」

弘文「才能ないって、そんな、星野さんそんなことない……」

寿帆「(弘文の言葉を遮るように)何が分かるんやあんにい！ 汗びちゃびちゃかいて、ハアハアいうて、のろのろのろのろ走ってるだけあんにわたしの何が分かるんや！」

弘文「星野さん、ぼく……」

寿帆「あんたの思ってるとおりに、トラックからあんた締め出して外周走らせるようにしたのわたしや。そやからワッキーに頼んだらまたトラック走らせてもらえんとちがう？あ、でも今度は他の子から締め出さくらったりしてな。ははっ」

弘文に背を向け歩き出す寿帆。弘文、小さくなる寿帆の背中をじっと見つめているが。

弘文「休部やって！ 脇坂先生、星野さんのこと休部扱いにするって！ だから退部届なんか持ってこなくてもエエって！ 気が変わったらいつでも戻って来いって！ 待ってるからって！ それから、それから……ぼくも待ってるから！ あの、あの、ぼくなんか待たれてても迷惑やろけど、でも、星野さん部活戻ってくるの、ぼくも待ってるから！」

寿帆、しばらくそのまま歩き続けているが、やがて立ち止まり振り向く。

寿帆「ホンマに迷惑なんじゃ！ ボケえ！」

叫ぶように言うと、弘文に背を向けて帰っていく。

○寿帆の家・彼女の部屋

制服のままベッド上、仰向けになっている寿帆。天井をポーンと見つめている。

ノックの音。寿帆無反応。

瑞恵「寿帆、入るよ」

瑞恵、部屋に入ってくる。

瑞恵「今日は荷が少のうてな。昼で終わりや」

寿帆、瑞恵を見ようとせずそのまま。

瑞恵「もうすぐ、正輝が来るわ。三人で何かおいしいもんでも食べに行こか」

寿帆「……何も食べたくない」

瑞恵「あんた、ほんまにこのまま部活辞めてしまうつもりなんか？」

寿帆、寝返り瑞恵に背を向ける。

瑞恵、ため息ついて。

瑞恵「まああんたの人生やから好きにしたらエエんやけど。お姉ちゃんとしてはちよつと情けないなあ、男にふられて大好きやったこと中途半端に終わらせてしまうなんてなあ」

寿帆、無言。

瑞恵「お守り、達也くんやなかったんやね」

寿帆「……」

瑞恵「やっぱりお姉ちゃんの見立てが当たってたかあ」

寿帆「……うるさい」

瑞恵「二回目のお赤飯、炊かれへんかった」

寿帆「……黙っててよ」

瑞恵「誰やったんやろねえお守り。でも寿帆のこと、ちゃんと見てて応援してくれてる人がいてたんやね。ありがたいなあ。それは忘れたらアカンよ」

寿帆「……」

瑞恵「県総体の時、部員で一人だけ応援に来てくれてたって言うてたやん。あんた『誰でもエエやん』って教えてくれへんかったけど、その人ちやうん？」

しばし間。寿帆、ガバツと起き上がり、

寿帆「うわっ」

瑞恵「え？」

寿帆、ベッドに腰掛ける。

寿帆「そうや、そうや。あいつや、吉村や」

瑞恵「吉村？……ああ、あの中学校でも一緒やった、ぼっちゃりした子。覚えてるわ。

「なんやあ、わたしも知ってる子やんか」

寿帆「うわ、うっわ、キモっ！ キショっ！

あゝ、何で気いつかへんかったんやろ。絶

対そうや。わたし、あんなやつにくれたお守り大事に持ってたんや……うわあ、マジかあ……吐きそうや」

頭を抱える寿帆をじっと見つめている
瑞恵。ゆっくり寿帆へ近づき、腰を落とす。

瑞恵「寿帆」

寿帆「もう、何い。わたし今めっちゃシヨツク受けてるんやから、ほっといてよ……あつ、あいつ家の前まで来てたってことや。うわあ、マジで最悪や」

瑞恵「あんた今、何言うた」

寿帆「え」

瑞恵「キモ、とかキシヨ、とか言うたな。気持ち悪いとか、気色悪いとかいう意味やろ、それ。吐きそうやとも最悪やとも言うたな。吉村君の何がキモくてキシヨくて吐きそうで最悪なんや」

寿帆「お姉ちゃん……」

瑞恵「『あんなやつ』ってどういうことや！
答えてみいっ！」

寿帆の頬を思い切り張り飛ばす瑞恵。

ベッドに横倒しになった寿帆の両肩を

掴み、無理やり起こす瑞恵。

瑞恵「え、何がキモいんや。何がキシヨいんや。何が最悪なんや。一人だけ応援にきてくれて、黙ってお守りまでくれてた吉村君の何が気持ち悪いんや、ああ？」

寿帆「そんなん、そんなんお姉ちゃんには分からへんわっ！」

瑞恵「分かったあもないわっ！ けどな、分かったことがある。あんたが吉村君見下してることや。あの子にずっとそんな態度とってきたんやな。同じクラブの、あんた一番応援してくれてた子に。許さへん。そんなんだけはお姉ちゃん絶対に許さへん」

睨みあう姉妹

○同・廊下

瑞恵、寿帆の襟首を掴んで引きずるよ

うにして歩かせている。

寿帆「ちよっ、やめてっ、やめてよお姉ちゃん」

瑞恵「エエ気になって人見下してからに。それも、自分のこと応援してくれてる人を……これが妹や思たら、情けな過ぎて涙も出えへんわ」

寿帆「やめてってえ」

瑞恵「何ほ勉強できても運動できてもな、そんな性根の人間はクズや。クズなんや。よう覚えとき」

寿帆「……」

そのとき玄関ドアが開く。入って来たのは正輝。

正輝「こんにちはあ……えっ」

瑞恵「何しに来たあっ！」

正輝「いや、何しにっっておまえ——寿帆ちゃんずつと落ち込んでるから、三人でご飯行こかって、俺にも早う仕事終わらせて、うち来るようにおまえが言うたんやないか……」

瑞恵「こんな性根腐れ、励ます価値なんかひとつもないわっ！」

髪も掴んで引きずる瑞恵。

寿帆「痛い、痛いお姉ちゃん」

正輝「おい、やめろ。やめろって。寿帆ちゃん痛がつてるやないか……」

止めに入ろうとする正輝を瑞恵、キツと睨みつけて。

瑞恵「ウチらのことや。口出しするなっ！」

そのまま寿帆を引きずっていく瑞恵。三和土までくると玄関ドアを開けてつき放すように寿帆を外に出す。

瑞恵「まだ部活してるんやろ吉村君。学校に戻ってちゃんとお礼言ってこい」

寿帆「お礼って……」

瑞恵「今までの態度のこともちゃんと謝ってくるんや。それができんかったら帰ってこんでエエ」

玄関ドアを激しい勢いで閉める瑞恵。

寿帆「お姉ちゃん……」
寿帆、立ちつくす。

○路上（夕暮れどき）

帰宅する生徒たち。その流れと逆に学校に向かって歩いていく寿帆。前から達也と由紀が手を繋いで楽しそうに話しながらやってくる。

道の端に寄り、顔を背ける寿帆。二人、寿帆に気づかず通り過ぎていく。寿帆、また歩き出す。

しばらく行くと前から自転車に乗った弘文がやってくる。互いに気づく。寿帆、弘文に向かって少し手を挙げる。弘文、それが自分に向けられたものと気づかず、後ろを見る。誰もいない。前を向き寿帆を見る。寿帆むすっとした顔で手を挙げ続けている。弘文、ゆっくり自転車をこぎながら、自分自身を指差す。小さく頷く寿帆。

弘文「え、え？」

自転車から降りる弘文。彼に近づいていく寿帆。二人の距離が縮まる。

○路上

歩く寿帆。少し遅れて自転車を押しながら弘文。

弘文「あ、あの、星野、さん」

寿帆、振り返って

寿帆「あのお守り、吉村君？」

見つめあう二人。小さく頷く弘文。

また歩き出す寿帆。少し遅れて弘文。

寿帆、立ち止まる。弘文も。

寿帆「入るか」

弘文「え？」

寿帆が指差したのはお好み焼き屋。

○お好み焼屋・中

鉄板を挟んで向かい合って座っている二人。弘文の前でお好み焼きがジュー

ジューと音たてている。寿帆の前には、
何もない。

弘文「あの、星野さん……」

寿帆「ほら、ブタ玉焼けてるで。わたしの

おごりや。食べえな」

弘文「あの、何で……」

寿帆「吉村君」

弘文「は、はい」

寿帆「県総体、応援に来てくれて……ありがとう」

弘文「え、え、そんな、お礼なんて、あの……

ええよ、そんな。ほくなんか行ったり

して迷惑やなかったかな。迷惑やったよね。

気づかれへんように帰ろって思ってたんや

けど、脇坂先生に見つかってしもたから。

ご、ごめん」

寿帆「それから、これ」

財布の中からお守りを取り出す寿帆。

テーブルの上にそっと置く。じつと見

つめる弘文。

弘文「……直接渡しても、受け取ってくれへ

んって思ったから……」

寿帆「……」

弘文「変なこととして、ごめん。ほんまに、ご

めんな」

寿帆「なんで、なんでそんな謝るん……」

弘文「いや、あの……ごめん」

寿帆「吉村君何も悪いことしてないのに、わ

たし吉村君に本気で謝らせてるんやな……」

テーブルの上に両肘をつき、顔を両掌

で覆い隠す寿帆。

寿帆「あゝあ」

弘文「あ、あの、星野さん」

寿帆「あゝ最低や。わたしホンマ最っ低や。

最低やったんや」

弘文「あ、あの……」

寿帆「(バツと顔をあげ) 吉村君!」

弘文「は、はいっ」

寿帆「トラック走らせへんようにしたりして

ごめんなさい! さっきは迷惑やなんて言っ

て、ごめんなさい！ それから、それから……とにかく、今までごめんなさい！」

鉄板に顔がくっつくくらい勢いで頭を下げる寿帆。茫然として寿帆を見つめる弘文。

弘文「星野さん、さっきの嘘やろ」

寿帆「え？」

顔を上げる寿帆。弘文が微笑んでいる。

弘文「ほら、さっき『才能がないからやめる』って言うたん。あれ、嘘や」

寿帆「……嘘と、違う」

弘文「じゃあ、せつかくやからいただくわ。

星野さんに何か奢ってもらうなんて、考えたこともなかった。はは」

お好み焼きにソースを塗っていく弘文。

弘文「インハイ、残念な結果やったけど、それは普段通りの力が出せへんかっただけで、星野さんに走り高跳びの才能がないのと違うよ——いただきます」

寿帆「——どんなことがあっても、どんな大舞台でも、普段通りの力出せるのも才能の一つや……」

弘文「星野さんは、その才能持ってると思うけどなあ、ぼく。ホンマは自分でもそれ、分かっているんちゃう——あ、何か偉そうやなぼく。ごめん」

寿帆「もう、謝らんでもエエって……何でそう思うん？」

弘文「何でって、うまいこと言えへんけど……そやかて練習の時の星野さん、自信満々やで。私が一番や、っていう雰囲気、全身からばんばん出してる。県大会のときもそうやったわ。アスリート、星野寿帆選手の大ファンのぼくが言うんやから間違いない」

寿帆「吉村君……」

弘文「インハイは見てへんから分からんけど、星野さんが予選の試技三回も失敗するなんて、その雰囲気出てなかったんやね、きつと」

寿帆「……そうや、出せへんかったんや」

弘文「うん。出せへんかったんやね。けど、そんなこともあるよ、たまには。そやから、ほく、星野さんがこのまま辞めてしまうの、もったいないって思うんや。跳んでるとき、星野さん、ほんまにめっちゃカッコエエ——ほくなんかフアンで申し訳ないんやけど」

寿帆「……『ほくなんか』って、もう言わんといて」

コテでお好み焼きを切り分け、口に運ぶ弘文。

弘文「アチ、アチツ——おいしいわ。走った後やからお腹へってるし、ホンマおいしい」

寿帆「吉村くん」

弘文「何」

寿帆「前から訊きたかったんやけど、あんたなんで陸上部入ったん？　そんでなんで干五なん？」

弘文「やっぱりおかしいかな、こんなデブがバタバタ走ってるのは」

寿帆「いや、それは……でも不思議で。吉村君、中学のときも確か美術部で、それに、その……はつきり言うけど運動神経もそんな……」

弘文「鈍足やしね。市の大会もすごい周回遅れで、部のみんなに恥かかせたみたいになつて、悪いと思ってるんや」

寿帆「……」

弘文「でも、笑うからなあ絶対、星野さん」
寿帆「笑わへん。笑わへんよ絶対。なあ吉村君。何で陸上部入ったん？　何で走ってるん？　教えてえや」

弘文「星野さんも食べえな」

寿帆「え」

弘文「アカン時ほどちゃんとメシ食べなアカン、いうてうちのおじいちゃんがいつも言うてるんや。今日星野さん久々に見て、すごい痩せてたからびつくりした。ちゃんとご飯食べられてないんちゃうん？」

寿帆「……」

弘文「星野さんが食べたなら、ぼくが陸上部入ったわけ話すわ」

寿帆「……あなた、何かすごいな」

弘文「え、何が。ただのデブやでぼくなにか」

寿帆「そんな言い方、もうせんでもエエって

……」

弘文「はい」

メニユー表を渡す弘文。

寿帆「うん」

受け取る寿帆。

○寿帆の家・廊下

玄関ドアを開ける寿帆

寿帆「ただいま」

廊下には瑞恵が立っている。靴を脱ぎ

家に入ろうとする寿帆。奥から顔を出

す正輝。心配そうに姉妹の様子を見る。

瑞恵「ちよい待ち。こっち見い」

動きが止まる寿帆。瑞恵を見る。

瑞恵「吉村君に会ってきたんか」

頷く寿帆。

瑞恵「ちゃんとお礼言うたか」

頷く寿帆。

瑞恵「ちゃんと謝ったか」

頷く寿帆。

瑞恵「よし。入ってよし」

家に入った寿帆に近づき、抱きしめる

瑞恵。優しく頭を撫でる。

瑞恵「あんた本気で叩いたの、お姉ちゃん今日が初めてや。お姉ちゃん今日のこと忘れ

へん。あんたも忘れんとってや」

頷く寿帆。

瑞恵、寿帆を離す。

瑞恵「よし、ご飯にしよか」

ホッとした顔で近寄って来る正輝。

正輝「うん、ご飯や。寿帆ちゃん、ご飯にしよ。俺な、寿帆ちゃん出てる間にな、スパー行つてきてん。そしたらエエ型のハマ

チが安うで売っててな。今捌いたところや。寿帆ちゃん好きやろハマチの刺身。あ、ビ

……」

ンチョウマグロも柵で売ってたからな、それも買うてきてん。寿帆ちゃん好きやろ。

ピンチョウウの刺身。な、食べよ食べよ」

寿帆「今はええ。お好み焼き食べてきたから」

瑞恵「吉村君と？」

寿帆「うん」

正輝「えっ」

瑞恵「へへえ」

廊下を歩いていく寿帆。

寿帆「お風呂先入るわ……お風呂上ってから

晩ご飯食べる」

瑞恵「珍しい。あんなに食欲なかったのに。

お好み焼き食べて来て、まだ食べられるんかいな」

寿帆「……アカンときほどちゃんとメシ食べなアカンのや——ありがとう正輝さん。ハマチもピンチョウもわたし、大好きや」

廊下を折れる寿帆。

瑞恵「へへえ」

瑞恵、微笑んでいる。

正輝「寿帆ちゃん、男の子とお好み焼き、食

べてきたんか……」

瑞恵「みたいやねえ」

正輝「つきあってるヤツと別れたいうてたやないか」

瑞恵「何あんたがショック受けてるのよ、お

好み焼きごときで」

正輝「いや、ショックとかそういうんやなくてやな……」

瑞恵「よかったなあ、お赤飯いっしょに食べることにならへんで」

正輝「え、何、それ」

笑いながら台所の方へ向かう瑞恵。

正輝「え、え、何、瑞恵。どういうこと、お赤飯て何？ それ。どういうことなん。教えてえな」

瑞恵の後を追いかけていく正輝。

○同・風呂場

湯船にぼーっと浸かっている寿帆。

○お好み焼屋（寿帆の回想）

（前々場面の続き。寿帆もコテを持ってお好み焼きを食べている）

寿帆「ついで、たーぼ？」

弘文「うん、ツイスターボ」

寿帆「いや、初めて聞くけど。何それ？」

弘文「サラブレッド、競走馬」

寿帆「競走馬って、競馬の馬のこと？」

弘文「そう」

寿帆「それが？」

弘文「ぼくが陸上部入ろうって思ったきつかけ」

寿帆「競馬の馬が？」

頷く弘文。

弘文「中三の時、電気屋——ほら商店街にある佐倉電気、あそこにお使いにいったとき、そのテレビでやってたの見たんや」

寿帆「何を」

弘文「福島記念、っていう競馬のレース中継」

寿帆「それに、そのツイスターボっていう馬が出てたん？」

弘文「うん」

寿帆「吉村君、前から競馬になんか興味あったん？」

弘文「いいや、全然。テレビでやってるの見たこともなかった」

寿帆「それが、何で」

弘文「ツイスターボって、逃げ馬なんや」

寿帆「逃げ馬？」

弘文「うん。スタートしたときからずーっと先頭走る馬のこと。あのとときのツイスターボもそうやった。最初からずーっと先頭」

寿帆「……」

弘文「最後の最後に、ヤグラストラって馬に抜かれて二着になってしまふんやけど。でも、レースの間中、十三頭引きつれてずーっと先頭走ってるの見て、何て言うか……すごい感動したんや」

寿帆「感動——競馬見て」

弘文「うん。感動としか言われへん。レース
終わって後ろ振り返ったら、佐倉電氣の二
代目の信一郎さんが立っててな。こいつカ
ッコエエやろって、笑ってた。ツインター
ボっていうんやでって、教えてくれた」

寿帆「……」

弘文「信一郎さん、そのときツインターボの
単勝馬券——あ、単勝っていうのは一着に
なる馬当てる馬券のことなんやけど——単
勝買って、結局アカンかったんやけど、
こいつの単勝買って負けても何の悔いも
ない。そんなこと思わせてくれる馬、他に
いてへんのやって」

寿帆「もしかして吉村君、そのツインターボ
って馬が走るの見て、陸上やりたくな
ったわけ?——」

目を伏せ、少し笑む弘文。

弘文「ほく、その時本気で思ったんや。ツイ
ンターボみたいに走れたら、あんなふう
に集団の先頭切って走れたら、どれだけ気持
ちエエんやろって」

寿帆「そのとき高校入ったら陸上部入ろうっ
て決めた——」

弘文「な、な。笑うやろ。笑てエエよ。自分
でもおかしいもん。だいたい絶対無理やし
な、ほくが先頭きって走るんなんて。ほん
まにアホや——（寿帆を見て）え、星野さ
ん、笑わへんの?」

寿帆「別に、笑わへんけど——でも、馬が走
ってるの見て、そんなこと思えるもんやの」
弘文「思ったんやなあそれが。そやからあの
日、佐倉電氣に電球買いに行つてなかつた
ら、ほくは陸上部にいてへん。ツインター
ボに人生狂わされたみたいなんや。はは
は」

寿帆「後悔は、してへんの? 陸上部入った
こと。すごい周回遅れになってみんなから
笑われたり、わたしからトラック締め出さ
れたりしてるんよ。それでも後悔はないの、
吉村君」

弘文「それはない。信一郎さんといっしょや。ツイインターボに狂わされた人生に後悔はないんや」

寿帆「……強いん？ そのツイインターボ」
弘文「ぼくが見た福島記念からしばらく勝てへんかった」

寿帆「そんな強くないんや」
弘文「けど、この前、七夕賞ってレースで八戦ぶりに勝ったんや。めっちゃくちや興奮した。ぼく、ツイインターボが勝つの初めて見たんや。全身の血が逆流するみたいやった。こいつがぼくを陸上部に入れてくれたんや。って思ったら、すごい嬉しかった。どんなことがあっても部活辞めんとこうって、そう思った」

寿帆「どんなことがあっても部活辞めんとこうって思った……」

弘文「それに、楽しいんや走ってると。星野さんとか、他の部員のみんなからみたら、しんどそうに、苦しそうに走ってるだけにしか見えへんやろけどな。でも、楽しいんや走ってると。おかしいやろ。ははは」

寿帆「……おかしくなんか、ないよ」

弘文「戻ってきたらエエやん星野さん。脇坂先生も休部扱いつて言うてるんやし。もつたいないよ、やっぱりこのまま辞めたりしたら」

寿帆「そのツイインターボ、次いつ走るん？」

弘文「え？」

寿帆「いつ走るん、ツイインターボ。わたしも見たいわ。いつ走るか教えてえや」

弘文「星野さん」

寿帆「何か、わたしもツイインターボが走るころ、見たあなつた」

寿帆と弘文、見つめあう。

○寿帆の家・風呂場

ボーっと湯船に浸かり続けている寿帆。
寿帆「ツイインターボ……」

呟くと、ゆっくり頭まで湯の中に沈み

込んでいく寿帆。

(F・O)

○佐倉電気・前(昼)

(テロップ・九月十九日(日) 産経

賞オールカマーへGⅢ(当日)

落ち着かない様子でいる弘文。

やってくる寿帆。弘文の前までくる。

弘文「ほんまに、来たんやね」

寿帆「来たよ」

弘文「家のテレビで観てもエエのに……」

寿帆「何かな、アンタと観たなってん。そんなこと言うんやったらアンタこそ家のテレビで観たらエエやん」

弘文「ぼくは、競馬中継はここで観るの恒例

やから」

寿帆「迷惑？ わたしが居てたら」

弘文「いや、迷惑とかそんな……じゃあ、入

るか」

○同・店内

自動ドアから店内に入る二人。大型テ

レビの前で腕組みして立っている信一

郎。

信一郎「遅かったやないか、もうすぐ始まる

で……ってエエッ!」

寿帆を連れてくる弘文を見て驚く信一

郎。バツが悪そうな弘文。

寿帆「こんにちは。星野といます」

信一郎「あ、はい、こんにちは……」

弘文「同級生の星野寿帆さん。ツイスターボ

のレースここで観たいっていうから、一緒

に来た」

信一郎「星野さんってヒロ、あの陸上部の？」

弘文「うん……(声が小さい)」

信一郎「走り高跳びでインターハイ出た？」

弘文「うん……(ますます声が小さい)」

寿帆「よく御存じなんですわね、わたしのこと」

信一郎「そらそうや。だってこいつここです

つとあんたのこと話してるもん」

弘文「……ああ、もううるさい」

寿帆「わたしのこと?」

信一郎「そうや。すっごい走り高跳びの選手なんやろ。めっちゃくちやカツコエエ跳び方するって、いっつも言うてるでこいつ」

寿帆「へえ」

信一郎「今、部活休んでるんやって」

寿帆「もう、そんなことまで言うてるの」

弘文「ごめん……そやからいっしょに来んでもよかつたんや……」

信一郎「何をぶつぶつ言うてるんや。こいつな、アンタの大ファンなんやて」

寿帆「はい。知ってます」

寿帆、微笑んで弘文を見る。弘文、顔を赤くして俯いている。

信一郎「きひひ。照れとる照れとる——ツインターボのこと、こいつから聞いたん?」

寿帆「はい」

信一郎「で、レース観たなつたんやな」

寿帆「はい。迷惑じゃなかったらここで一緒に見させてください」

信一郎「迷惑やなんて、何言うてるんや。大歓迎やで——しかし憧れの星野寿帆選手にツインターボのレースいっしょに観よつて誘うなんて、なかなかやるやないか、え、大ファンの吉村弘文君!」

弘文「別に誘ったわけやない。星野さんが勝手に来たんや……」

信一郎「きひひ。照れとる照れとる——星野さん」

寿帆「はい」

信一郎「競馬観るの初めて?」

寿帆「はい」

信一郎「そうか。競馬処女やな」

寿帆「え」

弘文「ちよつと信一郎さん!」

信一郎「星野さんの競馬バージン、今からツインターボがズッコーンと奪っちゃうよ」

弘文「信一郎さんって!」

寿帆「ズッコーンと、ですか」

信一郎「ああ、ズッコーンとや」

財布を取り出し、中から馬券を出す信一郎。⑩ツインターボの単勝、一万円馬券である。寿帆に見せる信一郎。

寿帆「これが馬券。初めて見ました」

信一郎「あと何分後かには七万円になる馬券や——よっしゃ、せつかくやから、このうちの千円分、星野さんが買ったことにしよう」

寿帆「え、どういうことですか」

信一郎「(馬券をしまいながら)つまり、ツインターボが勝ったら、配当金の十分の一、七千円は星野さんにあげるって言うてるのよ」

寿帆「えっ、えっ、いいです、そんな。わたしそんな気でここに来たわけじゃないし。

そんなお金、もらえません」

信一郎「ええって、ええって。遠慮すんな。

(弘文を指差し)あ、君の分はないよ。競馬は二十歳になってから! 学生、生徒は勝馬投票券を購入することはできません! お分かり?」

弘文「分かってるわ。何やさつきから、一人勝手にはしゃいで……」

信一郎「そらおまえ、いつも肥満児君とペアで観てる競馬中継に、いきなりこんなシュツとした美人ちゃんが現れたらやなあ、ドキもムネムネして、はしゃぎたくもなるってもんや、なあ」

プツと噴き出す寿帆。

弘文「アホか……肥満児とか、うるさいんや」
信一郎「せやかて肥満児やもん、なあ星野さん」

寿帆、笑いをこらえるのに必死。

弘文「ほんまにもう……ほら、もうオールカマーのパドック始まつてるよ」

大型テレビに輪乗りの様子が映し出されてる。画面に注目する三人。

信一郎「こうやってな、レース前にパドックを周回するんや。ここでな、馬の調子や気

合いの入り具合が分かったりする」
寿帆「へえ」

次々と画面に映し出されていく出走各馬。

弘文「きた」

信一郎「ああ」

寿帆「これが……」

弘文「うん。ツインターボ」

寿帆「青いマスクしてる」

信一郎「ああ。こいつのトレードマークみたいなもんや。エエ馬体や。毛艶ピカピカやで」

弘文「七夕賞のときと同じやね」

信一郎「ああ。いよいよ本格化したな、こいつ」

寿帆「本格化？」

信一郎「その馬が持つてる本来の能力、ポテンシャルを百パーセント出せる状態になつたってことや——星野さん」

寿帆「はい？」

信一郎「本格化を前にして引退するのはちよっともったいないのと違う」

寿帆「——」

信一郎「君の跳んでるところ見たことない俺が言うのもへんやな。ま、そのところは大ファンヒロがいちばんよく知ってるやろ」

じつと画面の中のツインターボを見つめている寿帆と弘文。

○第三十九回 産経賞オールカメラ

ゲートイン、スタートからゴールイン

までを実況ありのノーカットで。

ツインターボの鮮やかな逃げ切り勝ち。

ゴールの瞬間、三人の歓声がかぶさる

弘文の声「やったあ！」

信一郎の声「うおおおっ！」

寿帆の声「きゃああつ、勝ったっ！」

○佐倉電気、大型テレビの前に戻って

テレビ画面にはウイニングランをする
ツインターボが映し出されている。
肩で荒い息をしている弘文。ガッツポ
ーズをしたまま固まっている信一郎。
じつと画面を見つめている寿帆。

寿帆「ズッコーン」

弘文、信一郎「え？」

寿帆「ツインターボに奪われてしもた。わた
しの競馬バージン」

寿帆、二人を見て笑って。

信一郎、爆笑。

信一郎「な、な、な。言うたとおりだったや
ろ！」

頷く寿帆。

二人を複雑な表情で見る弘文。

○佐倉電気・店前

立っている寿帆と弘文。寿帆、五千円
札一枚と千円札二枚を手をしている。

寿帆「ほんまに貰ってエエのかな、これ」

弘文「取っといたらエエんちゃう。信一郎さ
んがそう言うてきかんのやから——レジの

金渡すやなんてアホや。アホの二代目や」

寿帆「何を怒ってんのよ」

弘文「別に怒ってへんけど——」

寿帆「ほんまに、凄かったわ。ツインターボ」

弘文「うん」

寿帆「全身の血が逆流する感じって、ほんま
やった」

弘文「うん」

寿帆「吉村君が陸上部入りたくなつた理由、
分かった気がする」

弘文「うん」

寿帆「わたしも、筋肉つけ直さんとな」

弘文「え？」

寿帆「一か月以上休んでたから、心肺機能も
落ちてるやろし。走り込みから始めなアカ
ンなあ。さて、どこまで戻せるか」

弘文「星野さん——」

寿帆「来月の記録会から出直しや。わたしも

ツインターボに背中押ししてもらた。吉村君とおんなじやな」

見つめあう二人。

弘文「うん。よかった」

寿帆「本格化する前に辞めるのはもったいな
いって、アホの二代目さんも言うてくれた
ことやしなあ——そしたらお好み、食べに
行こか。今日もおごったる」

七千円をピラピラとさせる寿帆。

弘文「何か下品やで、それ、星野さん」

寿帆「ふふっ。星野寿帆、初体験、すませち
やいました。カッコ競馬の」

弘文「また、そんなこと言う……」

寿帆「あはははっ。純やね、吉村君。あはは
はっ。さ、行こか」

弘文「うん」

二人並んで商店街を歩いていく。

店から出て来る信一郎、遠ざかってい
く二人の後ろ姿を見つめて。

信一郎「やるやんけ、肥満児」

信一郎、笑って。

(F・O)

○グラウンド (放課後)

トラックを走っている弘文。相変わら
ずの鈍足。

後ろから軽やかに走ってくる寿帆。追
い抜きざま弘文の背中をバンと叩いて。

寿帆「ほら吉村あ、頑張れ！」

弘文「おう！」

遠ざかる寿帆の背中を眩しげに見なが
ら走り続ける弘文。

トラックの中で準備運動をしている他
の部員たちが不思議そうに二人の様子
を見ている。

× × ×

走り高跳びの練習を始める寿帆。

拳手―助走―跳躍。失敗。バーが落ち
る。クッションの上、寝転がったまま
の寿帆。空を見上げる。吸い込まれる

ような空を、ただじっと見つめ続ける。
寺本「よっこいせ。なんやあ。しよっぱいジ
ャンプやなあ」

クツシヨンの上、寺本が立っている。
笑って寿帆を見下ろして。

寿帆「あ、寺本さん」

寺本「脇坂君から、アンタが練習再開したっ
て聞いてな。ちよつと気になって見にきた
んや。助走もジャンプもナマクラや。しつ
かり練習せんと、取り戻すのに時間かかる
でえ」

寿帆「寺本さん」

寺本「何や」

寿帆「全力疾走でした」

寺本「え」

寿帆「あれ」

寿帆、クツシヨンから立ち上がり、ト
ラックを走っている弘文を指差す。

寿帆「吉村君、全力疾走してるんです」

寺本「うん。そやな」

寿帆「わたし、そんなことも分からへんかつ
た……」

バン！ 寿帆の背中を叩く寺本。

寺本「ほら、跳ぶよ。今から！」

寿帆「はい！」

バーを設置しなおす寿帆。スタート位
置へと戻っていく。
走り続けている弘文。

(F・O)

○地区秋季記録会・会場

フィールド、トラックで様々な競技が
行われている。

○同・フィールド

走高跳。スタート位置に立っている寿
帆。アナウンスが流れる。

アナウンズ「女子走り高跳び、決勝。勝ち残
りは星野寿帆さん。ただいまより一メート
ル七十五センチに挑戦します。尚、この記

録は八月に行われました全国高校総体同部門、決勝進出ラインと同じです」

寿帆に注目が集まる。

寿帆、拳手。大きく一つ深呼吸。ゆっくりと助走。

踏み切って、ジャンプ！

しなやかな肢体が美しくバーを超えていく。クツションの上に落ちる。沸き上がる歓声。

選手観覧エリアで拍手をしている弘文。

○同・芝生観覧エリア

戻ってくる寿帆。近寄る弘文。

弘文「優勝おめでとう、星野さん」

寿帆「何が」

寿帆むすっとしている。

弘文「え」

寿帆「記録会で勝つのなんか当たり前、七十五超えるのも当たり前や。八十一跳んで総体優勝記録に並びたかったんや、わたしは」

弘文「……やっぱりカッコエエなあ。星野さんはそうやないとアカンわ」

寿帆「高校記録は来年まで取っとくわ」

弘文「うん。もうすぐ出番やから行くな、ほく」

観覧エリアから出ようとする弘文。

寿帆「吉村君」

振り返る弘文。見交す二人。

寿帆「あのお金、まだ残ってるんや。終わったらお好み焼きで打ち上げや」

笑って頷く弘文。遠ざかって行く後ろ

姿をじっと見つめる寿帆。

寿帆「……がんばれ」

寿帆を不思議そうな目で見ている他の部員達。

○同・トラック

千五百メートル走。

やはり鈍足の弘文。苦しげに喘ぎながら走る。

次々に追い抜かれていく。
その様を芝生観覧エリアでじっと見つめていた寿帆。
走り続ける弘文。周回遅れになる。
次々とゴールする選手たち。一人トラックを走り続ける弘文。

○同・芝生観覧エリア

いたるところでくすくすと笑い声がかかる。寿帆の周りでは部員たちが「あゝあ」「またかよ」「もうやめてほしいわ」などと呆れた声をあげはじめ。喘ぎながら走り続ける弘文をじっと見つめ続ける寿帆。

○同・トラック

走り続ける弘文。

○同・芝生観覧エリア

立ち上がり観覧エリアを跳び出す寿帆。驚く部員達。

○同・グラウンド

寿帆、グラウンドを駆ける。トラックコースを横切り、弘文のところまで駆けて行く。トラック内側ギリギリのところまで止まる。残り一周となった弘文、寿帆を見て驚く。足を止める。

弘文「星野、さん」

寿帆「各馬、今いっせいにスタートしました！」

弘文「え？」

寿帆「ほら、何やってるん！ あと一周やろ！ 走って！ 先手を取ったのはツイントーボ！」

頷き、走りだす弘文。

寿帆「いつものように最初から先頭を走ります、ツイントーボ！」

弘文、走る。寿帆もその内側について走って行く。一コーナー。

寿帆「ツイインターボ速い。後続を離れたまま今、一コーナー通過」

弘文、走る。二コーナー。

寿帆「飛ばします。ツイインターボ。ペースを保ったまま二コーナー通過」

弘文、走る。直線。

寿帆「直線に入ってもスピードが落ちないツイインターボ。なんとという速さでしょう！後続を大きく離している！」

弘文、走る。三コーナー。

寿帆「第三コーナー、ツイインターボ！スピードは落ちない、落ちない！いや、いっそう加速している！」

弘文、走る。四コーナー。

寿帆「さあ、最後の第四コーナーに入って先頭は変わらずツイインターボ！凄い！ここまで先頭を走り続けています！」

弘文、走る。最後の直線。

寿帆「さあ、さあ。いよいよ最後の直線に入りました。先頭はツイインターボ。後ろは大きく離れた！ツイインターボ、まだスピードを上げている！ぐんぐんぐん加速する！もう追いつける馬はいない！ラスト五十メートル！走れ走れツイインターボ！ツイインターボ走れ！」

弘文、ゴールイン。同時に倒れ込む。寿帆も倒れ込む。

寿帆「ツイインターボ、今一着でゴール！ぶっちぎり！強かった！速かった！」

弘文、喘ぎながら寿帆を見る。寿帆、汗まみれの顔で笑っている。寿帆、立ち上がった。

寿帆「勝ったのはツイインターボ！みんな見たか！これがツイインターボの走りだ！」

叫ぶ。
拍手が沸き起こる。

(F・O)

○佐倉電気・外景

△テロップ・一年後 一九九四年 十

二月十八日（日）

○同・中

大画面テレビの前で競馬中継を見ている弘文と信一郎。

弘文、驚くほどに痩せている。

メインレースが終わり、ため息をつく信一郎。

弘文「アカンなあ」

信一郎「うるさいわ」

弘文「やっぱり基本的に賭けごとの才能ないのちがう、信一郎さん」

信一郎「うるさいっちゅうてんねん」

自動ドアの開く音。

信一郎「はい、いらっしやい……おおっ、久しぶりい」

弘文、入口を見る。寿帆が笑って立っている。

寿帆「こんにちは」

○同・外

並んで歩く寿帆と弘文の後ろ姿を見送っている信一郎。

信一郎「やるやんけ、肥満児……とはもう言えんな」

信一郎、店内に戻る。

○路上

並んで歩く寿帆と弘文。

寿帆「思ったとおりや。あれからもずっと日曜はあそこで競馬観てたんやね」

弘文「うん——日体大合格、おめでとう」

寿帆「ありがとう。なあ、ツインターボは、あれから？」

弘文「勝ててない」

寿帆「そう」

弘文「あのオールカマーがピークやったんかなって、信一郎さん言ってる」

寿帆「そう——吉村君」

弘文「何」

寿帆「あんた、ほんまに痩せたね」

弘文「うん。あの二年の時の記録会あたりからいっぺんやった」

寿帆「それから何キロ痩せたん」

弘文「二十五キロ」

寿帆「二十五キロ！一年で！ほんまに？」

弘文「うん。高校入った時からだったら三十キロ。八十五キロが五十五キロになった」

寿帆「八十五キロが五十五キロ……」

弘文「うん。何か自分でも怖あなつて。病院行って検査してもらったこともあるんや。

けど異常なしやった。日々の運動の成果やろつて、お医者さん言うてた。研究対象にしたいくらいや、やて」

寿帆「一年生のときからの地道な努力が実を結んだわけやね。今年の最後の記録会、すごかったやん」

弘文「何それ、嫌み言うてるのん。最下位やっつてんで」

寿帆「嫌み違うよ。周回遅れにならんかったやん。もの凄い成長や。ほんまに凄い」

弘文「——星野さんも、凄い」

寿帆「え？」

弘文「ちゃんとインターハイ出て、決勝まで残った」

寿帆「……テッペンには手が届かへんかった。表彰台にも上れへんかった」

弘文「でも四位入賞なんて、凄いわ」

寿帆「ほんまにそう思ってくれてる？」

弘文「思ってるよ」

寿帆「ありがとう」

並んで歩き続ける二人。

○グラウンド

高校のグラウンド。隅に並んで立っている二人。

寿帆「誰もいてへん」

弘文「日曜やもん」

寿帆「私は去年の今頃、日曜でも練習してた」
弘文「だからこそその四位入賞や」

寿帆「うん——寒っ」

風が吹く。弘文に体をくつつける寿帆。
弘文、驚く。二人しばらくそのまま立
っている。

寿帆「ぶっ、ぶぶぶぶっ」

弘文「？」

寿帆「あはははっ。ガツチガチやん吉村君。

ホンマに純やなあ」

弘文「うるさいわ……」

いっそう身を寄せる寿帆。腕を組む。

寿帆「なあ、トラック歩こか」

弘文「うん」

寄りそい、ゆっくりとトラックを歩き
始める二人。

寿帆「吉村君が走り続けたトラックやね」

弘文「途中、走られへんようになったことも

あつたけど」

寿帆「——ごめん」

弘文「あはは冗談や。気にしてへん、そんな
こと」

寿帆「不思議やね。わたし吉村君のこと嫌い
やった。なんか生理的にダメやった。気持

ち悪いとか思ってた——」

弘文「知ってた、そんなことくらい」

寿帆「でも、その吉村君と今こうしてる。不
思議やね」

弘文「……」

寿帆「最初にお好み焼き食べた時、わたしの
大ファンやって言ってくれたよね」

弘文「うん。今でもそうや」

寿帆「大ファンなだけ？」

弘文「え——？」

寿帆「私の大ファンなだけって、聞いているん

弘文「ぼくが陸上部入ったのは、ツイスター

ボの走りに感動したこともあるけど」

寿帆「あるけど」

弘文「星野さんの近くに、ちよつとでも居て
たいって思ったからや」

寿帆、微笑んで頷く。

寿帆「もうちよつと早よ言え」

弘文「ごめん——てか、あれだけ嫌ってたく
せして何言うてんねんよ」

寿帆「ははは、ほんまやな」

弘文「でも、日体大にスポーツ推薦で入るな
んで、星野さんはほんまに凄いよなあ。続
けるんやろ、ハイジャン」

寿帆「うん。どこまで行けるか分からんけど、
もうちょつと頑張ってみるわ。けどな、総
体で優勝した子も入ってくるんや」

弘文「へーえ」

寿帆「まずはその子に勝たんとな」

弘文「おー、やる気満々。それでこそ星野寿
帆選手」

寿帆「吉村君も推薦決まったんやろ？」

弘文「うん。福岡の大学。スポーツ心理学の
権威がいる学校なんや」

寿帆「スポーツ心理学！へえ！」

弘文「三年なった頃から、本気で勉強したい
って思うようになったんや。その教授のゼ
ミに入るつもりや」

寿帆「エエこと聞いたあ。スランプになった
ら連絡するわ。ホンマやで」

弘文「ははは、待ってる。ちゃんとアドバイ
スできるようしつかり勉強せなアカンなあ」

寿帆「福岡か——」

弘文「東京か——あ、そうや」

寿帆「何」

弘文「ぼくな、来週二十五日にある有馬記念、
中山競馬場に観に行くんや」

寿帆「有馬記念？」

弘文「一年しめくくりのグランプリレース。

東京にいるおじさんが競馬好きで、頼んだ
ら、合格祝いに連れてったるって言うてく
れたんや——オカンはあんまりエエ顔して
へんけど。ははっ」

寿帆「それが何なん？」

弘文「ツインターボが出るんや」

寿帆「ツインターボが！」

弘文「うん。三冠取ったナリタブライアンや
ヒシアマゾンや、他にも強い馬いっぱい出

るから、正直勝つのは厳しいやろけど。でも、あいつの逃げ、この目で見れると思うと今から楽しみでしかたない」

寿帆「ええなあ。わたしも見たいなあ」

弘文「信一郎さんも羨ましがってた。『あいつの逃げを生で見れるなんて、殴ってやりたいほど羨ましい』やって。有馬記念の出走馬はな、ファン投票で決まるんや。全国の競馬ファンからたくさん票もらわんと、走られへん特別なレースなんや。そのレースに去年のオールカマーから勝ってないツインターボが出るんやで」

寿帆「へへえ、みんなツインターボのこと好きだったんや」

笑う二人。

トラックを一周し、歩き始めた地点に戻ってくる寿帆と弘文。

寿帆、弘文の手を離し、突然トラックを走り出す。驚く弘文。寿帆、走りながら振り返って。

寿帆「遠いわ！ 遠いわ福岡なんか！」

弘文「——遠ない！」

寿帆「遠いわ！ わたしも東京行ってまうねんで！」

寿帆、泣いている。走り出す。

弘文も、走り出す。寿帆を追う。

寿帆「もう会われへんやん！」

弘文「会えるよ！ 絶対会える！ なんや、

あんなに嫌ってたくせして！」

寿帆「うるさい！ 今は好きなんやから、しゃあないやん！」

弘文、寿帆に追いつく。両肩を掴み、振り向かせる。泣いている寿帆に口づ

ける。驚く寿帆だが、応える。

唇を離し、二人見つめあって。

寿帆「前のは、ノーカンやから、今のがわたし初めてやねんで」

弘文「前の……ああ」

寿帆「気にする？」

弘文「どんとこいや、そんなもん！」

寿帆を抱え上げる弘文。

寿帆「きゃあっ！」

弘文、そのまま走り出す。

弘文「手紙書く！ 電話もする！ 夏休み、帰ってきたらなんぼでも会える！」

寿帆「うん、うん！」

弘文「バイトして、金ためて、東京にも行く！」

寿帆「ほんまやで！ 絶対やで！」

弘文「絶対や！」

寿帆「したらお赤飯は自分で炊かなアカンなあ」

弘文「はあ？ なんやそれ！？」

寿帆「あははははっ。なあ、有馬記念、中山競馬場行ったら、パドック行く？」

弘文「うん。行くつもりや！」

寿帆「したらな、その時な、いちばん前まで行ってよ！ そんでな、目の前にツイ

ンターボが来たらな——」

弘文「うん！」

寿帆「ツインターボが目の前まで来たら——よろしく言うと言って！」

弘文、微笑んで大きく頷くと、いつそう早く走り出す。

弘文「よっしゃ、分かった！」

寿帆「約束やで！」

弘文「約束や！」

冬の風が舞う中、寿帆を抱えた弘文がトラックを走っていく。

グラウンドに、二人の笑い声が響く。

○第三十九回・有馬記念

ナリタブライアン勝利、ツインターボ惨敗の有馬記念を、ゲートイン・スタートから全頭、ゴールインまで、実況放送なしで。

(F・O)

○ツインターボ・経歴、(エンディング)

△黒い画面に以下経歴がせりあがって

くる

ツインターボ号(牡・鹿毛)

一九八八年四月十三日生誕

父・ライラリツジ

母・レーシングジーン(父・サンシー)

生国 日本(北海道静内町)

生産 福岡敏宏

馬主 黒岩晴男

調教師 笹倉武久(美浦)

秋葉清一(上山)

生涯成績 三十五戦六勝

中央 二十二戦 五勝

地方 十三戦 一勝

主な勝ち鞍

GⅡ 産経賞オールカマー(一九九三)

GⅢ ラジオたんぱ賞(一九九二)

七夕賞(一九九三)

一九九八年一月十五日死没

脚質 大逃げ

キャスト・スタッフもせりあがってくる。

(了)